



2017.06.17 News 新移民時代「フクオカ円卓会議」



6月17日（土）13:30～九州大学西新プラザ大会議室において、西日本新聞社主催、未来を創る財団共催で、新移民時代シンポジウム「フクオカ円卓会議」が開かれた。

180人の参加者を前に主催西日本新聞社柴田建哉社長は、昨年来取り組んできた新移民時代のキャンペーン報道は、メディアとして息長く取り組むテーマであると挨拶。



つづいて基調講演で、未来を創る財団の国松会長は、「人口減少のペースが激しく毎年78万人減少していく、これは毎年熊本市がなくなっていくような規模である。人口減少の対策として、イノベーションを起こそうとか、女性や高齢者の活躍を推進しようという話

があがるが、人口減少のペースを考えるとそれだけでは追いつかない。それであれば、外国から人に来てもらおうという話になるのが自然な流れだが、首相が「移民政策」を取らないとしており、議論が進まない。

こうした時に西日本新聞が「新移民時代」というキャンペーン報道をしたのは大変に意義深い。」と述べた。



円卓会議は、12人のパネリストと180人の会場参加者が一体になって共に考えるコンセプトで設営された。



- ・はじめは、出稼ぎ留学生というコピーに、何を言うのかと衝撃を受けた。次第に人口減少による労働力不足が深刻なかい離を生んでいる状況がよく分かった、というパネリスト。
- ・ネパールに行って驚いたのは、日本語学校がビジネスとして非常に盛んになっている。日本語まったく話せない講師や、クオリティが低いところもいくつもあった、と語る記者。
- ・ネパール出身の元留学生。ネパールは発展途上なので、さまざまな国へ稼ぎに行く。自分は、はじめ2007年に大分の日本語学校に留学した。まったくわからない習慣や社会、日本はルールがあって時間をしっかり守るが、ネパールはそういうのはあまりない。子供を呼び寄せたが、いじめに会って、早くネパールへ帰りたいと親を困らせた、と語る。
- ・異文化の人といるとストレスがある。日本人同士で、話さなくてもわかるという関係。空気が読める人たちといた方が居心地がいい。など、文化というのは排他的な性質を持つ。同じ文化の人たちだけの方が結束力は高くなるが、慣れや教育訓練によって対応はできる。共生社会をつくるにあたって、市民と一緒に継続して取り組んでいく必要があると、移民政策者は述べた。
- ・柳川から「やさしい日本語ツーリズム」をはじめめる運動の紹介もあった。多岐にわたる課題を語り合い、会場からも鋭い質問、意見が続いた。会場がテーマを共有した一体感のなか、70代の男性は、50年来西日本新聞を愛読している。シンポジウムなど出るのは初めてだが、重要性を感じて参加したと語った。パネリスト各位、会場参加者各位、まことにありがとうございました。

閉会にあたり、未来を創る財団石坂代表理事は、以下3つの事柄に取り組んでいきたいと述べた。

- 1 外国人にはフロントドアから入っていただく仕組みをつくる。
- 2 定住外国人に、ワンストップで対応できる受け入れセンター・部署を設ける。
- 3 人手不足にどう対応していくか、明確なポリシーをたてる。



1年に及ぶ企画、計画、取材、報道で日本社会の課題に取り組み、直面する問題をえぐり出した社会部取材班、それをバックアップされた西日本新聞社に改めて深い敬意を表します。